

## 教育と生死の風景（二）

### —戦争と平和をめぐる—

教育学科教授 和田 修 二

#### 1 平和の思想と戦略の不在

今年は第二次大戦終結60年目に当る。このため旧戦勝国と敗戦国のいずれでも、先の大戦を回顧するさまざまな行事や論議があるであろう。第二次大戦は、ユダヤ人のホロコーストや広島長崎に対する原爆投下という非戦闘員に対する疑いの余地のない大規模な無差別殺戮が周到に計画され実行されたという点で、私は戦争そのものの持つ悪魔性犯罪性が、かつてなく明瞭になった戦いであったと思う。

一方、この大戦での敗戦の結果、我国は初めて外国軍による占領を受け、過去の軍国主義国家主義と決別して、戦争放棄をうたう新憲法を制定し、平和国家民主国家として再出発した。以来、不戦を守って今日に至ったが、それが米国の「核の傘」に護られたものであったにせよ、この60年の不戦の実績は、我国にとっても全世界的にみても、画期的であったと言ってよい。現在も世界では至るところで戦闘が行われているし、戦後全く戦争をしなかった国は、旧戦勝国をはじめ皆無に近いからである。

しかし、戦後の世界を永らく支配してきた東西世界の政治的イデオロギー的軍事的対立、いわゆる「冷戦」が1980年代末に至って終焉すると、世界はより平和になるのではなく、却って一層不安定で混沌とした様相を呈してきた。それまで抑圧されてきた民族的宗教的地域的な対立が経済的な利害や資源問題とからんで、各地に武力紛争が続発するようになったからであ

る。特にイラク戦争前後から核の拡散やテロリズムとの戦い、国際的な復興支援等をめぐって、我国も直接戦争に巻きこまれる恐れが強くなり、こうした国際情勢の変化に対応して国内でも国家理想や国益の再考、憲法の改正が国民的な関心となりつつあるのは周知の通りである。

アメリカの歴史家ハンチントン<sup>1)</sup>は、20世紀の歴史は西欧の世界支配力が弱まって非西欧諸国が勃興したことであり、多極化したこれからの世界では異なった文明相互の衝突が起こる危険のあることを指摘したが<sup>1)</sup>、それが全くの杞憂とは言えない状況の中で我々がこれからも平和を守り不戦を貫くためには、我々はこれまで以上に冷静な現実認識、強固な自分自身の平和の哲学と戦略をもたなければならない。私は終戦当時旧制中学一年生であったため、今では戦前と戦中の生活、戦後の改革を実際に体験した稀少な世代の人間であるが、率直に言って今日の日本人に最も欠けているもの、我々がこの間一貫して疎かにしてきたのが、他ならぬこの日本人独自の平和の思想と戦略の探求であると思うのである。

戦後日本の変革に当って、我々は確かに平和主義と民主主義を国是として選択したし、それを学校教育を通じて熱心に教えようとしてきた。しかし、省みてその際、我々は平和主義や民主主義をすでに疑問の余地のない自明な人類普遍的価値や思想として、またその根とモデル

を自国の歴史と文化の中にはなく外に、専ら欧米に求める見方と教え方をしてきたのではないか。

こうした外に完成した手本を見ようとする西洋指向の権威主義的決定論的な思考は、実は今に始まったことではない、明治の近代化以来別けても教師を含む日本の知識人の特徴であったと言えるが、私はこの傾向が戦時中の極端な国家主義への反撥と重なって、戦後の我国の言論界や教育界で一段と強化されたのではないかと考えている。実際、私が最初に受けた戦後教育は、先の戦争が日本の一方的な侵略戦争であって、我々が民主国家平和国家として再生するためには、もう一度近代化をやり直すこと、換言すればその妨げとなる我々の内なる後進性、前近代的封建的なものをまず清算しなければならないというものであった。

私は戦後日本の平和主義と民主主義の選択、政治的な方向転換は正しかったと考えているし、既に和辻哲郎が指摘しているように、現実の変化に対して受容的で柔軟であること、いったん駄目だと分った時の切り換えの早さは、いわば日本人の国民性、美徳の一つだとも思っている。しかしそのために行われた戦後の教育には、当初から違和感と疑問を感じていた。例えば確かに日本が近隣諸国を侵略したのは事実で誤りだが、それをもって欧米諸国の植民地支配を不問にしたり、<sup>パールハーバー</sup>真珠湾の攻撃を理由に原爆の犯罪性を無視するのは一方的であるし、日本人が好戦的な国民だと言うなら逆に平和を愛していた証拠も同じほどあるはずだと思ったからである。しかしそうした素朴な少年の疑問も、まだ占領下であったことと、それを口にするのは戦争を本当に反省していないからだ、あの戦争を肯定しようとするものだという革進派の人々の主張の前に沈黙せざるをえなかったのである。

このようにまず最初に結論を出し、それに逆

うものを悪であり敵として断罪する論法は、基本的に短期の政策の実現を目指す政治に典型的な大衆操作の論法であるが、私はこの論法が教育界でも使われたこと、しかも戦後間もなく始まって長く続いた東西冷戦体制の下で、極めて政治的イデオロギー的観念的に、自由主義対社会主義、保守対革新、文部省対日教組の対立関係の中で教育関係者の間で行われたということが、結果的に戦後の日本人が冷静に歴史の現実を直視し、自ら主体的に戦争と平和の問題を掘り下げ、独自の平和の哲学と戦略をもつことを妨げたと思うのである。この政治的な目的を優先し、教育を政治の手段と見做す教育観、教育と政治を融合させた教育体制を、教育学者の村井 実<sup>2)</sup>は「政教混一」の教育と呼んで近代日本の学校教育の宿痼としてきびしく批判しているが、この体制は戦前だけでなく戦後も、また今も教育関係者の間に根強く生き続けていると言えるのではないか<sup>2)</sup>。

しかし戦後半世紀を経て、アメリカがベトナム、ソ連がアフガン侵攻で挫折し、社会主義諸国の内部でも革命に伴う粛清や内戦によってナチスのユダヤ人殺害に勝る大量の自国民に対するホロコーストが行われていたことが明らかとなるに及んで、結局いかなる政治体制もイデオロギーも絶対ではないことが明白となったのがこの間の歴史の教訓であるとするれば、教育が政治に従属することの危険と限界もまた明白となったと言ってよい。教育の本務は予め確定した価値や政治目標に向って急いで新しい人間類型を製造することではない。むしろ絶えずよき生活、よき国家、よき世界とは何かを自ら考えて自主的に生きる意欲と責任感と能力をもつ人間を育てることなのである。

近年、敗戦当時少年であった私と同世代の人々の自伝や回想を読む機会が少なくないが、彼等の多くが敗戦を境に文字通り180度変った教育と価値観の激変に驚き、戸惑い、その時受

けた不信感からいかに立直るか悩んだことを告白している。当時、戦後の民主化に当って活躍した言論人や教師の多くは、挙って戦争の責任が専ら軍部と軍部と結託した指導者にあり、国民は彼等に騙されていた、あの戦争で死んだ者はみな犬死だったことを強調したが、私の不信は軍部と戦前戦中の指導者だけではない。彼等を攻撃することで自らの戦争責任を封印している戦後民主化の旗手たちに対してもあったのである。

それにもかかわらず、我々がその不信をこえて生きなければならぬと思い、また実際に生きることができたのは何故か。私の場合、それは戦後の言論界教育界を主導した人々の言説や宣伝に納得したからではない。戦争によって全てを失ったあとでなお、その悲しみと苦しみに耐えてこれまでと変わらず誠実に生き続ける多数の人々が私のまわりにいたからである。

恐らく直接戦争と直面し、戦争の被害を最も多く受けながら、戦後も戦争の責任を負うて日本の再建のために最もよく働いたのは、大正生まれの人々であろう。戦後生まれの世代が大多数となった今日では、この時代のことは書物を通して知る他はないが、我々は戦後史を語る書物の多くが、既に戦後世代の手になるものであることと、そうした書物の著者が総じて高等教育を受けたいわゆる知識人であることに留意する必要がある。「歴史とは歴史についての観念の歴史である」とはイギリスの歴史家コーリングウッドの言であるが、我々は学者の史観—それも殆どは近代西洋起源の史観の応用—と解釈によって書かれた歴史だけが歴史の真実ではないことを忘れてはなるまい。あの時代を生きた世代の老人達は、多く語ることなく世を去り、また去ろうとしているが、我々は彼等の心をどれだけ理解してきたか。彼等が黙々と働きながら自ら多くを語らなかつたのは、彼等が何も考えていなかった、語ることがなかつたので

はない。また戦争に行った者も戦争で死んだ者も、単に無知だった、騙されていたのではない。それは戦争も平和も学者達が語るより遙かに深く複雑であることと、自分達の代りに亡くなった者達の愛と悲しみを知ればこそ、生き残った者の責任として、彼等が死者の分まで生きねばならぬと心に誓っていたからではないか。

## 2 温故知新

このようなわけで、大学で教育学を専攻し、自分も教育学者として戦後の教育に参加してきた一人として、私は戦後日本の教育を主導してきた人々、学者や教師の善意と努力を疑うものではないが、そこには明らかに重大な欠点があったと考える。それは他でもない、彼等の多くが戦後の改革に当って過去の日本の過ちを清算しようとして性急に自国の歴史的伝統と絶縁し、外に完全な理想と手本を求めようとしたことである。

周知のように、戦後制定された教育基本法では、国家主義への反省から人類普遍の原理に基づいて教育を考えようとする強い指向が読みとれるし、戦後書かれた教育学書の殆どは、平和や民主主義を語るに当って専ら西洋の歴史と人物、思想を引用している。言うまでもなく、こうした人類普遍の立場から、あるいは<sup>インターナショナル</sup>国際的な視野の下に教育を考えることは、別けても今日において必要不可欠であるが、そうした普遍的・一般的国際的な知識や言明は、その対極としての<sup>ナショナル</sup>特殊的具体的国民的なものの理解と尊重とのバランスにおいて初めて積極的な意義をもつのであって、それを欠落すれば単なる抽象的な観念論、一般論に終ってしまう。そうなることを避けようとして外国の事例を引用する、理想の国や平和を考えるためにプラトンやカントを、民主主義を語るためにフランス革命やリンカーン、デューイやマルクスをどれほど援用しても、一般の日本人、教師や生徒にとっては所詮

実感の伴わぬ異国の物語であることを免れない。むしろプラトンと同時に聖徳太子を、アメリカ・デモクラシーと並んで江戸時代の生活と自治を教えてこそ学習者の理解と関心も高まるはずであって、教師を含む知識人の任務は、新たな外国思想や制度の単なる紹介や宣伝ではない。新たなもの異質なものの本質を理解し比較することによって新と旧、内と外とを媒介し、人々の自主的な思考と主体的な判断を助けることであろう。

自分もナチスに迫害されたドイツの哲学者ヤスパースは、戦後大学に復帰するに当たって行った講演の中で、生き残った彼自身にも戦争を阻止できなかった責任があること、ドイツの再生には悪しきものを取り除くだけでなく、内なるよきものを伸ばすことが大切であると述べて、祖国の歴史と文化への愛を説いた。外部の権威に追従するのではなく内なる創造力を自覚して発展させることは、個人の教育だけでなく国民の教育にも通ずる教育の基本であるが、省みて戦後日本の知識人と教師達が、平和主義民主主義の選択と教育の改革に当たって、先人の誤りを知ると同時に先人の努力、自国の歴史と文化の中に新たな未来を拓く力を見ることにもっと熱心であれば、今日これほどの国民的な精神的衰弱と空白を生むこともなかったのではないか。

実際、今にして思えば、我々は戦後の再出発に当たって、近代化の不足だけでなく近代化自体のもつ限界を、また近代化の成果のみに関心してその背後にある西洋文化との対質を疎かにしてきたこれまでの我々の近代化の姿勢と知識人のあり方をもっと深刻に反省すべきであった。なぜなら、近代化を支えた近代合理主義的な世界観と人間観、即ちこの世界は予め法則的に確定した機械的な構造をもって居り、人間はこの法則と構造を知ることのできる理性をもった唯一の存在であるという確信は、一方では科学技術と産業経済の発展による豊かな生活を可能に

すると共に、際限のない開発による資源の涸渇と環境破壊を生む。また、その人間中心主義的な思考と行動が、その後のエゴイズムとニヒリズムによる社会と人心の荒廃、集団的なエゴイズムを体現した国家主義の抬頭とそれに続く世界大戦の危険に通底していたと言えるからである。

この近代化の内に潜むエゴイズムとニヒリズムの危険を抑止してきたのが、西洋の場合はキリスト教的な隣人愛とポリスのな公共重視の伝統と生活であったが、この宗教的文化的な伝統は、ある意味で我々の神道的佛教的なそれとは対極的な最も異質のものであったと言ってよい。従ってこの文化的歴史的背景に十分に配慮せずに行われた近代化、漱石のいう「近代日本の開化」は、不随意的に皮相なもの、西欧とは似て非なるものになる惧れがあったのだが、総じて日本の知識人はこのことにこれまで驚くほど無頓着であったと言わなければならない。

周知のように、近代化以後の日本の指導層を構成したのは、基本的に西洋指向の強い高等教育を受けた学歴エリートであった。彼等の知識は専ら書物を通した観念的で理論的なものであったが、それでも彼等の主導によって日本の近代化がめざましい成功をとげたのは、他方でそれを受けとめる柔軟性と現世的な敬虔さを身につけた勤勉で人の和を大切にする庶民がいたからである。また、明治期の開化と昭和の戦後改革に当たっては、前者は欧米列強による帝国主義的な植民地化の脅威に対抗する、後者は敗戦による極度の経済的窮乏の中から生活を再建するという、誰にでも分り易い共通の課題と目標があった。私は戦後日本の急速な復興は、この共通の課題、危機意識に基づく国民の協力と戦後の合理化民主化政策が結びついた奇蹟であったと考えている。

このように考えると、日本が1960年代から高度経済成長期に入り、70年代以降未曾有の便利

で豊かな生活を実現すると同時に、これまで予期しなかったさまざまな変化と問題が、いわゆる近代化の負の負債が、はじめは子どもの生活と教育に、近年ではエリートと思われていた各界の大人の不幸事となって続出するようになったのも、逆の理由で理解できるであろう。なぜなら、この頃からいわゆる一億総中流意識の中で国民の危機感と連帯感が薄れ、戦後の民主化合理化の陰の balanサーであった伝統的な共同体の生活習慣と旧世代の人々の倫理観が、この間の世代交替と都市化核家族化の中で急速に失われてしまったからである。

実際、人々の生活の世俗化と富裕化が進めば、合理主義的な思考が功利主義に偏向し、エゴイズムとニヒリズムを誘発することは西欧でも同じであり、今日価値観の混乱、犯罪や汚職の増加は世界的な現象であると言える。しかし、こうした問題に対する対策、とりわけ犯罪被害者のような弱者の人権の保護は、西欧に比べると我国はまだひどく遅れていると思う。周知のように、戦後の西欧諸国、別けても北欧諸国は、際限のない所有指向の経済発展よりも福祉国家の建設を選び、近年では特に環境保護に熱心であるが、日本の政財界の指導者達はアメリカをモデルとして今も更なる経済効率の向上を目指す合理化競争の推進を「地球化」の課題だと考えているようにみえるのである。

しかしながら、1962年にレイチェル・カーソンが『沈黙の春』を書いて地球規模での環境汚染の危険を警告し<sup>3)</sup>、1972年にローマ・クラブが『成長の限界』を発表して以来、これまでの高度経済成長路線には根本的な限界があることが次第に広く世界に認識されるようになった。そしてその延長線上に1992年リオデジャネイロで「国連環境開発会議」（地球サミット）が開催され、1997年の「地球温暖化防止京都会議」となったのだが、この間終始積極的だったEU諸国に比べ、日本政府の動きは決して主体的積

極的とは見えなかった。もっとも、我国は工場の大気汚染の防止や低公害車の開発、資源再生等、個別の分野での技術的な公害対策では先進的な成果をあげているのであるが、それを統合する国としての総合的なはっきりとした将来展望と戦略がない。換言すれば、環境問題にせよ平和問題にせよ、国際的には常にアメリカを初めとする周辺諸国の意向を気にして、我々に本当の自分の理想、自分の哲学といえるものがないことが明らかになったのが、私はバブル経済崩壊以後の我国の混迷と沈滞、いわゆる「失われた10年」ではなかったかと思うのである。

### 3 ポストモダンへの前走

我々はここで、ポスト冷戦の国際社会が政治的文明的に多極化多元化したこと、しかも人口問題や資源・環境問題等、近未来に深刻化する地球規模での大問題を抱えて、各国がその選択を誤まれば全人類の破滅を招きかねない一蓮托生の危機にあることを直視し、その中で我々日本人がこれから自主的に何をなすべきであり、何が実際にできるかを改めて冷静に、しかし早急に再考しなければならない。そのためにはまず、近代化以来我々の別けても知識人や教師の根強い信念となってきた普遍的に妥当する真理が既に確定した形で実在するという先入見、決定論的で還元主義的な思考から脱却しなければならない。こうした信念と思考が、安易に外に権威やモデルを求めさせると共に、自主的な思考、異質なものととの対話と共生を不能にするからである。

これに対して、当面の国益よりも人類全体の生存と地球環境の保護を優先し、異質なものととの共生をめざして物事をより柔軟に考え、それぞれの組織や集団に自主性と創造性を認めようとする「新思考」と社会変革の運動が、ベトナム戦争を境に最初はアメリカ、次いで世界の各地に広がったが、この変革運動と連動していた

のがいわゆる「ニューサイエンス」に代表される自然科学内部におけるパラダイムの変化であった。それは自然界を超時間的な法則的因果関係によって確定された機械的構造をもつ「閉じたシステム」と考える近代科学の世界像が限られた条件の下でしか通用しないこと、自然界には時間が創造的な意味をもつ不可逆的な関係が満ちていて、一見固定したシステムに見えるものも、その内と外に向って更に幾重にも別のシステムを成して絶えず揺らいで居り、宇宙全体が多重の「開かれたシステム」をなして不断に進化しているというものであるが、私は1984年に渡米した折に散逸構造論でノーベル化学賞を受けたイリヤ・プリゴジンに会ってから、この変革運動が決して偶然のものではない新しい時代、「ポストモダン」の前走であることを実感し、同時に国際社会における我々日本人のこれからの使命をみた思いがした<sup>4)</sup>。なぜなら、前稿で言及したように、世界人類が同一の制度や同一の思想によってではなく、それぞれの歴史的文化的宗教的な相違を尊重しながら共生することができるためには、我々がまず決定論的なものの見方を超えることができればならぬが、現代科学のパラダイムはこの意識変革の強力な支援となることができること、しかもこの現代科学の世界像は欧米人には新しいものであっても、我々日本人にはさほど違和感のない、我々の伝統的な神道の佛教的な自然観世界観と基本的に合致するものだったからである。

中村 元は日本人の思考法の特徴として、(1)与えられた現実の容認、(2)人間結合組織の重視、(3)非合理主義的傾向をあげている<sup>5)</sup>。そして、これらの特徴は必ずしも日本にのみ特有のものではないが、この三つの特徴がすべて揃っているのは日本だけであると言う。我々の先祖は、古代から人間と自然を対立的にではなく一体のものとして考え、我々が生きている現

象世界の中に直ちに絶対者を、換言すれば神々を認めようとした。この考え方は佛教が入ってきてからも継承され、中世の日本では山川草木も精神があり、悟りを開いて救われると考えていた。このようにあらゆるものに神聖性と存在意義を認め、また常に人の和を大切にする思考態度は、世界でも稀な温和な風土とまわりを海で守られてきた歴史によるところが大きいであろう。従って過去の日本のすべてを無条件に美化したり普遍化することは誤りであるが、近代化以降の日本の知識人が閉鎖的封建的後進的として自嘲的に語ってきた江戸時代にしても、限られた資源と条件の下で最も質の高い生活を実現するという点で、今日的に言えば循環型エコ社会であったと見るができること、また日本人の非合理的直観的情緒的傾向も、単に合理的分析的論理的思考と対立するのではなく、互いの限界を補完し合うことのできるものであることを忘れてはならないのである。

このように考えると、私は欧米型の近代化の限界と全人類が否応なく「宇宙船地球号」の内部で共生せねばならぬことが明らかとなり、新しい民族的宗教的対立と文明の衝突の危険が増している今日こそ、ある意味で我々の出番であり、我々はもともと人と人、人と自然の共生を指向してきた我々の文化的伝統を想起し、全人類全地球の共生のために率先して貢献することを我々の歴史的な課題、国家理想として自覚し直さなければならないと思う。最初に述べたように、我々は戦後新たな国家理想として平和主義と民主主義を選んだが、その意味と内容を絶えず主体的に思考し吟味することを疎かにしてきた。このため戦後の平和論や平和教育は、憲法九條をめぐる「改憲か護憲か」という二者択一のイデオロギー論争となるか、感情的な反戦主義一國平和主義に終って、その狭間で他国の青少年に比べても著しく国際貢献に対する関心と意欲の低い、「戦争が迫れば逃げる」とい

うことしかできない若者を増やしてきたようにみえる。保守派の人々や政府は、これに対して国を愛する心の教育を強化しようとしているが、本当の愛国心の教育は、言葉や強制ではなく、実際に世界歴史的な展望と責任感をもって積極的に働き、自国の文化と先人の努力の中に新しい時代に生きる知恵と力を学ぼうとする大人達の日常不断的努力と、生きた実例を示すことができれば難しいのである。私が先に遠藤虚籟という綴織工芸家の生涯と思想に関心をもったのも、戦後日本の国家理想の再考に当って、彼に日本人の真情と平和思想の原型を見ることができると思ったからであった<sup>6)</sup>。

遠藤虚籟は本名を順治といい、明治23年(1890)山形縣の鶴岡に生まれた。16歳の時上京、苦学して画家を目指したが体をこわして断念し、宗教運動や社会運動を経て中年になってから綴織を始めた人で、宇宙人主義を唱える異色の作家・思想家でもあった。彼は昭和8年に帝展特選になった『陶窯の図』をはじめとするゴブラン風の華麗な綴織壁掛の大作を連作して美術界の注目を浴び、昭和11年から文展無鑑査になったが、昭和15年に日本が全面的な戦時体制に入って絹織物をはじめとする贅沢品の製造が禁止された時、芸術保存のため自分だけ許されて綴織をすることに深く悩んだ末、その後の人生を第二次大戦で犠牲になったもの全ての霊を一切無差別平等に供養し、恒久的な世界平和を祈願するための綴織曼荼羅の謹作に捧げようと決心し、彼の弟子であり終生の協力者であった和田秋野と共に戦中戦後をこの悲願一筋に生きて、昭和38年(1963)73歳で千葉縣館山で病没した。

彼はこの間に20年の歳月をかけて独力でいずれも襖大の大きな佛像8体を織るというとほうもない偉業をなしとげたが、その中の最も大きな曼荼羅中央部『中尊阿弥陀如来』がニューヨークの国連本部に、『脇侍観世音菩薩』が栃

木縣満願寺に、『脇侍勢至菩薩』が東京浅草寺に、『不動明王』が秋田縣に賢寺にそれぞれ奉納されて実在している。しかし、彼がこの仕事を戦後の美術界とは没交渉で行ったことと、その作品が一般に公開されることなく散逸してしまったために、戦後の日本では彼の存在も彼の作品も全く忘れられ、知られることなく今日に至っている。

私はこのことを惜しんだ有志の人々と共に、彼の作品の所在を追跡して『順霊の綴錦織—世界平和の祈願に生きた遠藤虚籟・秋野の芸術と思想』(燈影舎)を出版したが、その端緒となったのが、戦争末期に彼が疎開した山形縣鶴引町の日沢寺に、戦後村人達が造った糸塚であった。彼がこの寺に滞在したのは1年余であったが、彼はその時、一つのねがいを書き残していた。それは彼が曼荼羅謹作に当って佛像になった絹糸は佛像になるが故に人々に拝まれるが、同じ絹糸でも端糸になったものは空しく屑糸として捨てられるのを悼んで、彼がその曼荼羅奉行中最も困難な時期を過した日沢寺に、将来この糸屑を供養する塔を建て、日本人の至情を後世に伝えと共に、ここを恒久的な世界平和祈願の発祥地にしたいというものであった。この糸塚は、そのねがいを忘れずにいた村人達が、彼の没後25年を記念して建てたものである。

戦争と芸術のかかわりを語るとき、多くの人々はナチスの暴虐に抗議したピカソの『ゲルニカ』をあげる。しかし、そのまま行けば間違いなく戦後の日本の美術界で作家としての社会的名声を極めたに違いないこの遠藤虚籟という芸術家の隠れた仕事と生涯に、私はより強い共感と感動を覚えずには居られない。なぜなら、その表現は異なっても、彼のようにその特権に甘えず、人間として誠実に戦争の苦しみと哀しみを受けとめた無数の人々の切ない愛と祈り、やさしさと献身の上に我々の今の生活があるということ、その故にまた、いかなる時も我々に

代って死んだもの、傷ついたもの、忘れられたもの、苦しんでいるものへの負い目と責任を知って生きることが、私には最も確実な世界平和の前提であり、我々日本人の真情、平和思想の原点もまたそこに求めることができるように思われるからである。

中村 元は、日本人の人間に対する愛情の強調と連関して、西洋人と日本人の戦争観の違いをあげ、敵味方の区別なく死者の冥福を祈ることは平安時代から始まった我国の特徴的な伝統であって西洋人にはないことを指摘している。自らを正義として敵味方を区別し、敵は最後まで敵と考えるのは、西洋人だけでなく今日世界の現実であるが、こうした思考を超えぬ限り敗者の怨みは残って戦争再発の悪循環は止まることがない。遠藤虚籟は学歴とも派閥とも無縁な独学在野の芸術家であった。彼がその後半生を賭けた綴織曼荼羅は結局未完であったが、その規模の大きさと、戦中戦後の最も困難な時代に彼我怨親一切無差別に戦争犠牲者を弔い、佛教的な慈悲の精神に基づく和解と平和の回復を芸術を通して内外に訴えようとしたこと、換言すれば、日本人にも日本人の平和の思想と展望があることと、我々が捨身になってかかれば我々には自分でも信じられない程の大きな力があることを実際に実行し実証した点で、私は彼が確かに共生の時代に向けて先駆けた昭和の代表的日本人であったと言えると思うのである。

#### 【註】

- 1) S. ハンチントン、鈴木主税訳『文明の衝突』、集英社、1998年
  - 2) 村井 実、『教育と民主主義』、東洋館出版社、2005年
  - 3) R. カーソン、青葉築一訳『沈黙の春』、2001年
  - 4) I. プリゴジン、伏見康治他訳『混沌からの秩序』、みすず書房、1987年
  - 5) 中村 元、『日本人の思惟方法』、春秋社、1989年
  - 6) 和田修二、『教育の本道』、玉川大学出版部、2002年
- R. G. Collingwood, The Idea of History, Oxford, 1946.